九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学体育大会参加者の運動部参加の動機

山本，教人
Institute of Health and Science Kyushu University

金崎，良三
Institute of Health and Science Kyushu University

南，貞己
Kagoshima University

https://doi.org/10.15017/571

出版情報：健康科学. 14, pp.25-33, 1992-02-08. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

J. Health Sci., 14 : 25—33, 1992.

大学体育大会参加者の運動部参加の動機

山 本 教 人　　金 崎 良 三　　南　　貞 己*

Motives for Athletic Club Participation of Participants in the Intercollegiate Athletic Meeting

Norihito YAMAMOTO, Ryozo KANEZAKI and Sadami MINAMI*

Summary

The aims of this study were to clarify the motives for athletic club participation of participants in the intercollegiate athletic meeting and to compare these motives from various viewpoints. The data were obtained from 1,837 subjects who participated in the intercollegiate athletic meeting. Twenty-five items of questionnaire used in this study constituted seven categories of participation motives, namely, "avoidance", "achievement", "health and physical fitness", "affiliation", "free and equality", "adherence", and "social usefulness" motives.

Main findings were summarized as follows:

1) As a whole, "health and physical fitness", "affiliation", and "adherence" were the significant motives for athletic club participation. This means that the instrumental values of sports were significant for participants in the intercollegiate athletic meeting. The significance of "avoidance" motive was relatively limited.

2) Comparative analyses were unedertaken from various viewpoints. A comparison by grade differences indicated that the influence of "social usefulness" motive was strong in lower grades(1st-year and 2nd-year students) than higher grades(3rd-year and 4th-year students). "Social usefulness", "health and physical fitness", and "free and equality" were the significant motives for junior college students. This means that the instrumental values of sports were significant for junior college students' participation for the athletic clubs. The influence of "free and equality" motive was the weakest for the students of physical education major. It was thought that this tendency reflected the inequal human relations within athletic clubs. Next comparisons were carried out in terms of position and role differences within athletic clubs. The results indicated that the motives of "achievement", "affiliation", and "free and equality" were significant for the regulars than the other members of club and "achievement" motive was the most significant for captain. Critical differences emerged from an inspection regarding relationship between one's intention of continuing sports and participation motives. Except for the "social usefulness" motive, every motive exerted significantly different influences for the students who intend to continue sports and who had no intention of continuing sports. The influence of "achievement", "health and physical fitness", "affiliation", "free and equality", and "adherence" motives were significant for the students who had intention of

Institute of Health Science, Kyushu University 11, Kasuga 816, Japan.
*Kagoshima University, Kagoshima 890, Japan.

continuing sports. For the students who had no intention of continuing sports, "avoidance" motive was significant. This means that the students who have no intention of continuing sports are participating athletic clubs because they can't quit the team they belong.

Key Words : Participation motive, Intercollegiate athletic club, Intercollegiate athletic meeting

(Journal of Health Science, 14 : 25—33, 1992)

緒　言

スポーツ参加の動機に関する研究としては，既に青少年のスポーツクラブ参加者を対象としたGill et al.[5]やGould et al.[6], Klint and Weiss[7], Brodkin and Weiss[2]の一連の研究がある。彼らの研究によれば，スポーツクラブ参加に関連のある動機として，おおむね7つから8つの動機が挙げられている。この内，「達成や地位」，「チームの雰囲気」，「体力」，「エネルギーの解放」，「友人」などの動機は，これらの研究者にほぼ共通して認められるものである。また，若者スポーツに関する研究の中で，Passer[11]はスポーツ参加に関連のある動機として，「親和」，「技術の向上」，「刺激」，「成功と地位」，「体力」，「エネルギーの解放」の6つの動機を挙げている。

ところで山本[13]は，現在，一方では大学生の運動部離れという現象が生起しているにもかかわらず，また一方では，一度運動部に所属した者がなかなか集団を去ろうとはしないという事実に着目し，彼らをして運動部への継続的参加へと駆り立てている動機とはどのようなものであるのかを調べたことがある。結果は，やめようにもやめられないからだとする理由が最も強く，非常に落胆させられるようなものであったが，このことは，スポーツ参加，あるいは運動部参加が，従来の研究で考えられてきたような肯定的な理由づけのみに規定されているのではないことを意味しており，非常に興味深いものであった。

本論では，以上のような昨今の研究動向を考慮しつつ，九州地区大学体育大会参加者を対象に，彼らの運動部への継続的参加にどのような動機が関連しているのかを明らかにし，さまざまな観点からその比較を行おうと思う。

ところで，九州地区大学体育協議会は，スポーツを通じて，九州地区大学相互の親睦を図り，併せて学生体育の普及，発展に寄与することを目的に組織され，1）九州地区大学体育大会の開催，2）大学体育振興のための調査研究及び研究会の開催，3）その他の事業を行っている。体育大会は平成2年度で，第40回の開催を数えたわけであるが，九州地区大学体育大会の参加者を対象とした過去の調査（第5回大会時，第7回大会時，第27回大会時，第35回大会時）から，時代の推移とともに大会の規模はもとより，学生の大会参加の態度，大会参加の効果に対する評価等に変化が生じてきていることがうかがわれる。運動部を離れ，サークル志向の大学生が主流派を占めつつある今日的状況の中で，体育大会参加者がどのような動機で運動部に所属し続けているのか，その実態を把握しておくことは，今後の大会運営を考えるうえで非常に重要なことであろう。以上が本研究に着手した理由であり，本研究の意義でもある。

方　法

1．調査対象

本研究で調査の対象となったのは，第40回九州地区大学体育大会（夏季大会）に参加した運動部所属の学生1,837名であった（男子1,023名，女子814名）。彼らが専門とするスポーツ種目は，男子15種目，女子12種目に分類することができた。

2．調査の時期と方法

調査は平成2年7月に実施された。調査票は体育大会の競技開催前に行われる各種目の代表者会議の席上，各大学の代表者に配布され，大会期間中に各々の競技参加者に記入してもらった後，一括して競技毎の大会本部に提出してもらうことで回収された。調査票の配布数2,942に対して有効な回答は1,837，回収率は62.4％であった。

3．質問紙の構成と質問項目

本研究で用いた運動部参加の動機に関する質問紙の質問項目のすべてを表1に示した。質問紙の構成は，山本[13]の研究結果に全面的に依拠した。すなわち，山本によれば，大学生を運動部への継続的な参加へと駆り立てている動機として，「回避」，「達成」，「健康・体力」，「親和」，「自由・平等性」，「固執」，「社会的有用性」の7つが重要であるとされたが，本研究においても，以上7つの動機を体育大会参加者の運動部への継続的参加に関連あるものとして扱った。各動機を構成している項目は合計で25項目である。項目の1.～7.は「回避」動機を構成する項目であるが，これらは，運動部への継続的参加の理由が，やめることによって生じる

Table 1. A list of 25 possible reasons for participating in athletic clubs

回避動機	
1.	やめるとチームメイト、あるいは指導者との関係が気まずくなるから。
2.	やめると仲間に引け目を感じると思うから。
3.	やめるとチームメイト、あるいは指導者に非難されるから。
4.	やめると意志の弱い人間だと他人に思われそうでいやだから。
5.	やめるとチームメイト、あるいは指導者に迷惑をかけるから。
6.	やめたらチームの雰囲気を乱すから。
7.	やめると出身高校の指導者、あるいは後輩に迷惑をかけるから。
達成動機	
8.	まだまだ技術、あるいは記録が向上するという望みがあるから。
9.	レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから。
10.	成功して有名になりたいから。
11.	少しでもうまくなり、あるいは良い記録を出し、競技を楽しめるようになりたいから。
健康・体力動機	
12.	健康を維持したいから。
13.	体力をつけたいから。
14.	常に体を動かしていたいから。
親和動機	
15.	部活を通じて一生涯の友人を得たいから。
16.	日常生活で困った時に助けてくれる仲間がいるから。
17.	続けていると部内外に多くの友人ができるから。
自由・平等性動機	
18.	おしつけられず、自主的に練習できるから。
19.	だれもが平等に練習できるから。
20.	チームの雰囲気が自由だから。
固執動機	
21.	やめないで続けたという満足感が味わいたいから。
22.	やめたという挫折感を味わいたくないから。
23.	最後まで続けることが目標だから。
社会的有用性動機	
24.	続けていると就職に有利だから。
25.	やめると就職に不利になるから。

主として対人関係を中心としたトラブルを考えると，やめられないからだということを意味している。次の項目8.～11.は「達成」動機を構成する項目である。これらは，運動部への参加の理由が，技術の向上に対する期待や成功に対する期待にあることを意味している。項目の12.～14.は「健康・体力」動機を構成している項目である。これらは，運動部参加の動機が，健康や体力の維持，増進にあるということを意味している。次の項目15.～17.は「親和」動機を構成している項目である。これらは，運動部への参加の理由として，部活動を通じての交友関係の広がりを重視するものである。次の18.～20.の項目は「自由・平等性」動機を構成する項目である。つまりこれらの項目で意味されていることは，運動部への継続的参加の理由としてチームの雰囲気が重要であるということである。項目21.～23.は「固執」動機を構成している。これらの項目はいずれも，何がなんでも最後まで続けるというように，やめないで続けることそのものを部活動継続の目的とするところにその特徴がある。最後の24.と25.の項目は「社会的有用性」動機を構成している項目である。これらは，部活動継続の有する社会的な便益に浴することが，活動継続の目的となっているものである。以上7つの動機を構成する25項目の測定スケールには，「1」そう思わない，「2」どちらかというとそう思わない，「3」どちらともいえない，「4」どちらかというとそう思う，「5」そう思うの5段階評定を採用した。

結果と考察

1．全体的傾向

図1には各動機の相対的な重要度と，それを構成す

る項目の素点の平均値を示した。なお表中に示した平均値は，その数値が高いほど当該項目に対する回答が肯定的であったことを意味している。各動機の重要度（図中●印で示した）に関しては，「回避」動機，「社会的有用性」動機以外の5つの動機で回答は肯定的であったが，中でも「健康・体力」動機，「親和」動機，「固執」動機の得点が高く運動部への継続的な参加に関わる重要な動機であることがわかる。「健康・体力」動機や「親和」動機の得点が高いということは，スポーツを健康づくりや体力の向上，あるいは友達づくりの手段として位置付けているということを意味し，体育大会参加者の運動部への継続的参加の理由に，スポ

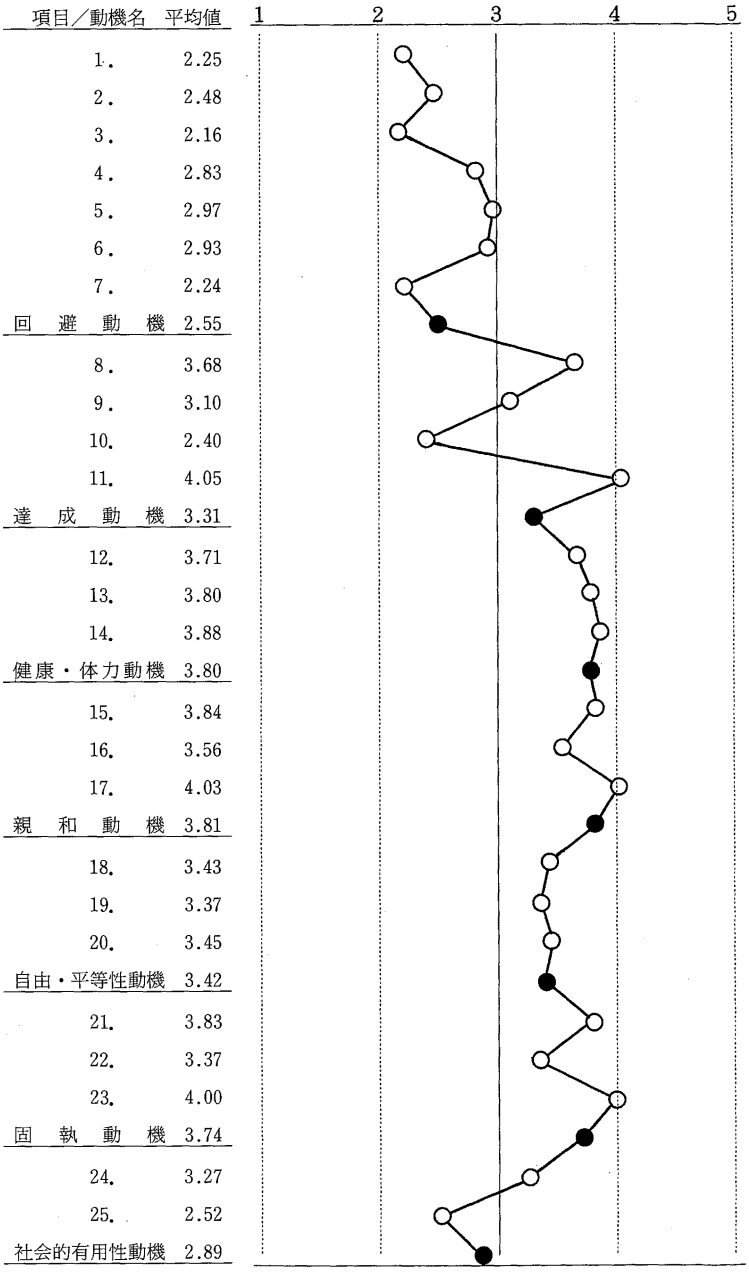

Fig. 1 Mean importance ratings of all items and seven motives for participation

一ツのもつ手段的な価値が大いに関係しているといえそうである。一方，スポーツの本質的な部分に関わると思われる「達成」動機は，「11.少しでもうまくなり，あるいは良い記録を出し，競技を楽しめるようになりたいから」の項目で最も肯定的な回答を得ているものの，「9.レギュラーの座を取りたいから，あるいはずっとレギュラーでいたいから」と「10. 成功して有名になりたいから」の項目の得点が相対的に低く，「達成」動機としての平均点を下げている。以上のことは，同じ達成に関わってはいても，絶対的な基準，つまりはレギュラーになることや有名になることへの挑戦といった側面よりは，自己の能力への挑戦といった側面が，運動部に所属し続ける理由として重要であることを意味しているものと思われる。

項目別（図中○印で示した）にみてみると，「11.少しでもうまくなり，あるいは良い記録を出し，競技を楽しめるようになりたいから」や「17. 続けていると部内外に多くの友人ができるから」，「23.最後まで続けることが目標だから」の得点が高く，肯定的な反応を得ているのに反し，「回避」動機を構成する項目に対しては，その反応はいずれも否定的なものであった。つまり，全体的にみれば，やめられないから部活動を続けているのだとする理由は優位にはなり得ないということである。

2．性別，学年別にみた参加動機の比較

表2には性別に運動部参加の動機を比較した結果を示した。表より，「回避」動機と「親和」動機を除くすべての動機で有意な差が生じていることがわかる（すなわち「達成」動機で0.1%水準の有意差が，「健康・体力」動機，「自由・平等性」動機，「社会的有用性」動機で1%水準の有意差が，そして「固執」動機で5%水準の有意差が生じている）。これらの動機について性別に素点の平均値を比較してみると，「達成」，「健康・体力」，「自由・平等性」，「社会的有用性」の各動機は男子においてその影響が強く，「固執」動機のみその影響は女子において強いということがわかる。しかしながら，なぜこういう違いが生じるのかについては明らかではない。

Table 2. Means of participation motives by sex differences

動機名	男子	女子	T-値
回　　避	17.82	17.83	.01
達　　成	14.08	12.19	11.24***
健康・体力	11.60	11.14	3.37**
親　　和	11.33	11.57	1.89
自由・平等性	10.40	10.06	2.65**
固　　執	11.07	11.38	2.18*
社会的有用性	5.94	5.59	3.23**

注）*p<.05　**p<.01　***p<.001

表3には学年別に運動部参加の動機を比較した結果を示した。なお4年制大学と短大とでは学年のもつ意味が異なると考え，比較には短大生は加えていない。4群間で有意差の生じたのは「社会的有用性」動機（5%水準）のみであったが，素点をみるとその影響は高学年よりも低学年に強いことがわかる。低学年ほど部活動継続が有する社会的な便益を過大に評価する傾向があるということであろう。

3．大学種別，専攻別にみた参加動機の比較

大学種別に運動部参加の動機を比較した結果を表4に示した。表より，「達成」動機と「社会的有用性」動機で0.1%水準の有意差が，「健康・体力」動機と「自由・平等性」動機で1%水準の有意差が生じていることがわかる。これら有意差の生じた4つの動機の中で，「達成」動機は私立大学においてその影響が最も強く，それ以外の動機の影響は短大生において最も強かった。つまり短大生にとっては，部活動継続の理由として，何かを成し遂げることや自らの技能を向上させるといったスポーツのもつ本質的な要素が重要なのではなく，就職に有利に働くとか，健康・体力の向上に役立つといったようなスポーツのもつ手段的な価値の方がより重要であるといえそうである。一方，「達成」動機の影

Table 3. Means of participation motives by grade differences

動機名	1年生	2年生	3年生	4年生	F-値
回　　避	17.85	17.91	17.64	17.51	.21
達　　成	13.66	13.67	13.21	13.47	1.42
健康・体力	11.45	11.27	11.14	11.36	.79
親　　和	11.39	11.59	11.16	11.37	1.99
自由・平等性	10.34	10.03	10.11	10.39	1.18
固　　執	10.96	11.29	11.26	11.20	1.11
社会的有用性	5.69	5.88	5.53	5.25	2.95*

注）*p<.05

響が私立大学において最も強いのは，体育学部を有する大学があることや，スポーツでの推薦入学者が多くいることの反映であるのかも知れない。

次に，専攻別に運動部への参加動機の比較を行った結果を示したものが表5である。なお所属学部・学科に関しては，「1.体育系学部・学科」，「2.体育以外の教育系学部・学科」，「3.教育以外の理科系」，「4.教育以外の文科系」の4つの選択肢の中から答えてもらった。表より，「達成」，「親和」，「自由・平等性」，「社会的有用性」の各動機で0.1%水準の有意差が，「固執」動機で5%水準の有意差が生じていることがわかる。これら有意差の生じた動機の中でも，「達成」，「親和」，「固執」，「社会的有用性」の各動機の影響は，教育以外の文科系において最も強いことがわかる。しかしながら，なぜそのような結果になったのかについては明らかではない。一方「自由・平等性」動機の影響は，体育系学部・学科において最も弱かったが，このことは部内における人間関係の反映であるように思われる。つまり，運動部の非民主主義的あり方をめぐってはつとに批判されていることであるが，中でも体育系の学部・学科においては部員にチームの雰囲気を自由だと判断させないようなことが行われているということであろう。

4．地位，役割別にみた参加動機の比較

運動部への参加動機をレギュラー，準レギュラー，一般部員ごとに比較した結果を示したものが表6である。なおここでのレギュラーとは，ほとんどの試合に出場している者のことを意味し，準レギュラーとは，メンバーチェンジ等で出場したり，時にはフルに出場する者のこと意味する。そして一般部員とは，ほとんど試合に出場しない者のことを意味するものとして使っている。表より「達成」動機で0.1%水準の有意差が，「親和」動機と「固執」動機で1%水準の有意差が，そして，「自由・平等性」動機で5%水準の有意差が生じていることがわかる。これらの内，「固執」動機を除くすべての動機の影響はレギュラーにおいて最も強く，一般部員において最も弱い。つまり，試合に出場できるか否かが，彼らの達成意欲や，チーム内外での友人関係，さらにチームの雰囲気の善し悪しの判断に影響を及ぼしてるものと推察される。

次に部内での地位別に運動部への参加動機を比較したものが表7である。「達成」動機で0.1%水準の有意差が，「健康・体力」，「自由・平等性」，「固執」の各動機でそれぞれ5%水準の有意差が生じていることがわかるが，いずれの場合も，その影響は主将において最も強い。特に「達成」動機に関しては，主将とその他の部員とではその影響に顕著な差が生じているが，このことは，主将がチームの達成に重要な責任を負わされていることと関連がありそうである。

Table 4. Means of participation motives by school differences

動機名	国公立	私立	短大	F-値
回　　避	17.70	18.06	17.84	1.94
達　　成	12.23	13.70	12.17	23.04***
健康・体力	11.11	11.40	11.80	6.54**
親　　和	11.42	11.37	11.63	1.32
自由・平等性	10.02	10.23	10.62	5.39**
固　　執	11.21	11.15	11.36	.67
社会的有用性	5.02	6.10	6.18	45.73***

注）**p<.01　***p<.001

Table 5. Means of participation motives by academic specialty differences

動機名	体育系	教育系	理科系	文科系	F-値
回　　避	18.50	17.65	17.28	17.94	2.59
達　　成	13.32	12.43	13.15	13.62	6.75***
健康・体力	11.10	11.32	11.61	11.43	2.15
親　　和	11.21	11.62	11.12	11.75	6.74***
自由・平等性	9.65	10.18	10.52	10.35	7.16***
固　　執	11.24	11.33	10.88	11.45	3.70*
社会的有用性	5.79	5.47	5.48	6.11	9.15***

注）*p<.05　***p<.001

Table 6. Means of participation motives by position differences within athletic clubs

動機名	レギュラー	準レギュラー	一般部員	F-値
回　　避	17.88	17.74	17.92	.11
達　　成	13.56	13.34	12.69	8.44***
健康・体力	11.54	11.28	11.33	1.51
親　　和	11.64	11.40	11.13	5.61**
自由・平等性	10.45	10.22	10.00	4.11*
固　　執	11.46	10.93	11.06	5.42**
社会的有用性	5.72	5.94	5.78	1.39

注）*p<.05　**p<.01　***p<.001

Table 7. Means of participation motives by role differences within athletic clubs

動機名	主将	副将	主務	会計	なし	F-値
回　　避	18.54	17.90	17.52	17.24	17.81	.65
達　　成	13.92	12.99	11.40	12.73	13.40	9.26***
健康・体力	11.82	11.47	10.58	11.21	11.43	3.07*
親　　和	12.04	11.56	11.23	11.39	11.40	1.85
自由・平等性	10.67	10.20	9.67	10.63	10.24	2.41*
固　　執	12.07	11.25	11.40	11.38	11.12	3.03*
社会的有用性	5.69	5.94	5.81	5.74	5.78	.18

注）*p<.05　***p<.001

5．スポーツ継続の意図と参加動機

人が継続的にスポーツ活動を続ける意図をもっているか否かは，現在の運動部参加の動機がどのようなものであるのかということと密接な関連をもっているものと思われる。従ってここでは，今後スポーツ継続の意図を有す者とそうでない者について，現在の運動部参加の動機を比較してみた。スポーツ継続の意図については，今後スポーツを続けるつもりがありますかという質問に「1.必ず続ける」，「2.おそらく続ける」，「3.おそらく続けないだろう」，「4.続けない」，「5.わからない」の5つの選択肢の中から回答してもらい，その強さを測定した。対立を明確にするために表8には，「1.必ず続ける」とした者と「3.おそらく続けないだろう」，「4.続けない」と回答した者の現在の運動部参加の動機を比較した結果を示した。結果は，「社会的有用性」動機を除くすべての動機で0.1%水準の有意差が生じたことを示している。素点の平均をみてみると，有意差の生じた動機の内，「回避」動機以外のすべての動機の影響は「必ず続ける」とした者において強かった。一方「回避」動機の影響は，「おそらく続けないだろう」，「続けない」とする者において強かった。以上のことは，スポーツ継続の意図をもつ群が，現在の運動部参加の重要な理由として，スポーツ的達成やその他スポーツにまつわる二次的な価値を重視しているのに反し，スポーツ継続の意図をもたない群は，やめたくてもやめられないということを運動部参加の主要な理由としているということである。

Table 8. Participation motives and intention of continuing sports

動機名	1	2	T-値
回　　避	17.09	19.35	2.86***
達　　成	14.40	11.02	6.91***
健康・体力	12.25	9.36	7.29***
親　　和	11.96	10.17	4.80***
自由・平等性	10.73	9.40	4.05***
固　　執	11.81	10.06	4.41***
社会的有用性	5.82	5.70	.41

注）1.：必ず続ける　2.：おそらく続けない・続けない　***p<.001

要　　約

九州地区大学体育大会参加者を対象に，彼らの運動部への継続的参加の動機が何であるのかを明らかにし，さまざまな観点からその比較を行った。調査の対象となったのは，第40回九州地区大学体育大会に参加した運動部所属の学生1,837名であった。本研究で用いた質問紙の項目は25項目であり，それらは大学生の運動部参加に関連のある，「回避」，「達成」，「健康・体力」，

「親和」,「自由・平等性」,「固執」,「社会的有用性」の7つの動機を構成していた。

1）各動機の重要度に関しては，全体的にみれば，「健康・体力」動機,「親和」動機,「固執」動機が重要であった。このことは，体育大会参加者の運動部への継続的参加の理由として，スポーツのもつ手段的な価値が重要であること意味しているものと思われた。「回避」動機に対する回答は否定的なものであり，やめられないから部活動を続けているのだとする理由は優位にはなり得ないということであった。

2）次にさまざまな観点から参加動機の比較を行った。学年別の比較では,「社会的有用性」動機の得点が高学年よりも低学年において高かった。大学種別の比較では,「社会的有用性」,「健康・体力」,「自由・平等性」の各動機の影響が短大生において最も強く，短大生にとっては部活動継続の理由として，スポーツのもつ手段的な価値がより重要であると判断された。専攻別の比較では,「自由・平等性」動機の影響が体育系学部・学科において最も弱かった。これは部内における不平等な人間関係の反映であるように思われた。地位別の比較では，有意差の生じた「達成」,「親和」,「固執」,「自由・平等性」の各動機の内,「固執」動機を除くすべての動機の影響はレギュラーにおいて最も強く，一般部員において最も弱かった。このことは，試合に出場できるか否かが，彼らの達成意欲やチーム内外での友人関係，さらにチームの雰囲気の善し悪しの判断に影響を及ぼしていることの反映であると推察された。役割別の参加動機の比較では,「達成」動機の影響が主将において最も強く，主将がチームの達成に重要な責任を負わされていることと関連がありそうであった。スポーツ継続の意図と参加動機の関係を検証した結果,「社会的有用性」動機を除くすべての動機で有意差が生じたが,「回避」動機以外のすべての動機の影響はスポーツ継続の意図をもつ群において強く,「回避」動機の影響は，スポーツ継続の意図をもたない群において最も強かった。このことは，スポーツ継続の意図をもつ群が，現在の運動部参加の重要な理由として，スポーツ的達成やその他スポーツにまつわる二次的な価値を重視しているのに反し，スポーツ継続の意図をもたない群は，やめたくてもやめられないということを運動部参加の主要な理由としているということであると判断された。

引用・参考文献

1) Bird, A. M.: Development of a model for predicting team performance. In Loy, J. W., Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (Eds.), Sport, culture and society. 2nd, Revised ed., Lea & Febiger, Philadelphia, 1981. pp. 74-80.

2) Brodkin, P. and Weiss, M. R.: Developmenal differences in motivation for participating in competitive swimming. Journal of Sport and Exercise Psychology, 12:248-263, 1990.

3) コーファー(祐宗 省三訳)：動機づけと情動．心理学叢書3，サイエンス社，1981. Pp. 265. (Cofer, C. N.: Motivation and emotion. Scott, Foresman and Company, Illinois, 1972.)

4) デシ(安藤 延男・石田 梅男訳)：内発的動機づけ．誠信書房，1980. Pp. 374. (Deci, E. L.: Intrinsic motivation. Plenum, 1975.)

5) Gill, D. L., Gross, J. B. and Huddleston, S.: Participation motivation in youth sports. International Journal of Sport Psychology, 14:1-14, 1983.

6) Gould, D., Feltz, D. and Weiss, M.: Motives for participating in competitive youth swimming. International Journal of Sport Psychology, 16:126-140, 1985.

7) Klint, K. A. and Weiss, M. R.: Dropping in and Dropping out: Participation motives of current and former youth gymnasts. Canadian Journal of Applied Sport Science, 11(2):106-114, 1986.

8) Martens, R.: Influence of participation motivation on success and satisfaction in team performance. The Research Quarterly, 41:510-518, 1970.

9) マレー（八木 冕訳)：動機と情緒．現代心理学入門3，岩波書店，1966. Pp. 176. (Murray, E. D.: Motivation and emotion. Prentice-Hall, 1964.)

10) 丹羽 劭昭，村松 洋子：女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究．体育学研究，24: 25-38, 1979.

11) Passer, M. W.: Children in sport: Participation

motives and psychological stress. Quest,33: 231-244,1982.

12) Robinson,T.T.and Carron,A.V.:Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport.Journal of Sport Psychology,4:364-378,1982.

13) 山本 教人：大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較，体育学研究,35:109-119, 1990.

14) 山本 教人：正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式，健康科学，13:49-58, 1991.

15) 米川 直樹：「動機づけの意味」．松田 岩男，杉原隆編著，運動心理学入門，大修館書店，1987. pp.55-58.